

医家有馬家の系譜について

今井 秀

今井整形外科・皮フ科

医家有馬家は、江戸初期に分家し紀州徳川家と福知山朽木家の藩医として仕え明治まで連綿と続いた。紀州有馬家については、佐伯理一郎著「有馬涼及及有馬家に就て」(『日本医史学雑誌』)や『有馬良橋傳』並びに白峯顕成著『くろ谷金戒光明寺に眠る人びと』に詳しい報告がある。今般、福知山藩医有馬家末裔の有馬良宏氏が所有する「福知山有馬家略譜」を閲覧したので、医家有馬家の系譜について報告する。

丹波福知山藩は、関ヶ原合戦で戦功のあった有馬豊氏が初代藩主となり、その後藩主は変遷したが、寛文九(1669)年朽木植昌が常陸土浦より移封され、以後朽木家が13代にわたり藩主として統治した。一方、紀州和歌山藩は、関ヶ原合戦の後浅野幸長が立藩し、二代長晟の安芸広島移封により、家康の10男徳川頼宣が元和五(1619)年藩主となり、以後徳川家が14代にわたり統治した。

福知山藩は、玄門四天王の一人山脇玄心(東洋の祖父)が江戸初期に仕えた。のちに禁裏医となり後水尾天皇から法印と養寿院の号ならびに頭巾と鳩の杖を賜っている。その後明治維新まで福知山藩朽木家の医療を担ったのが有馬家で、有馬玄哲の長男良竹が初代藩医となり、8代龍仙まで続いた。良竹は後西天皇(諱良仁)即位の際、良の字を避け涼竹に改めた。法眼まで進み幕府医官となり、江戸赤坂今井谷に住み、のち朽木植昌侯に仕えた。

医家有馬家初代の有馬玄哲は、玄心と同じく玄朔門下で後水尾天皇の御医に叙され法印となり、京部下立売西洞院に住した。松原の姓を改め有馬氏を称すことを許され、龍寿院の号を賜り、「養老」の題で「老楽の養ふ道を人もしれ水無月までも残るこふりを」の御製を戴いた。

玄哲は、明暦元(1655)年徳川幕府の求めで次男涼及を伴い江戸に下り、將軍家綱を治療した。折柄参府中の紀州南龍公(頼宣)の病氣治療のため、道作(玄心)が請われたが、後水尾上皇は「朕は一日たりと道作なかるべからず。道作あらざれば朕心安からず」と話されたため、玄哲が南龍公を治療した。有馬家と紀州侯との関係はこの時から始まる。

涼及は、その後紀州徳川藩医初代となった。涼及は宏達不羈で医術に精しく、霊元天皇や東山天皇の侍医として長年奉仕し、法眼に叙せられた。涼及にまつわる話は快挙に暇がないが、碁に夢中になり後西天皇に京を追われた話や、「寝てみる桜」の話、さらに茶人としても高名で「涼及井戸茶碗」を所持した。また、松原一閑齋に師事した合田求吾の『医道聞書』には、「東洋曰。医ハ英雄ナラ子バ大功ヲ立ル事アタワス。此古方ノ起リハ有馬良牛(涼及)ト云者天下ノ英雄ニテ後西院ノ違勅ノ罪ヲ蒙リシ程ノ人ナリ。ソレヨリ(並河)天民ニ伝ヘラレタリ」とあり、涼及は後水尾上皇御悩甚だしき時、衆議を経ずに承氣湯を奉じ、瀉下して速に回復せしめた。そのため涼及は古方派の嚆矢と位置づけられている。

また、福知山藩第8代藩主朽木昌綱は蘭癖大名の一人で、前野良沢に蘭学を学び西洋文化を盛んに取り入れた。昌綱は『解体新書』翻訳に加わり、大槻玄沢の長崎留学を支援し、藩医の有馬文伸を玄沢の弟子として送り込んだ。文伸は3代良益の孫元晁のことで、4代涼築の養子となり改名した。文伸は『蘭説弁惑』を、また、昌綱自身も『西洋錢譜』や『泰西輿地図説』を著している。

有馬涼築は丹後田辺藩新宮道廓の長男で、山脇東洋に学び、3代良益の養子となり家督を継いだ。娘の春枝は甥の新宮涼庭に娶わせた。涼庭は、私塾「順正書院」を建て、多くの弟子を育て、新宮一門は隆盛した。涼民、涼閣は京都療病院(京都府立医大の前身)の設立に貢献している。

このように医家有馬家は、玄哲を始祖とし紀州徳川家と福知山朽木家に仕え、多くの秀逸な医家を輩出した。明治期には、紀州藩医7代元函の長男有馬良橋が、日露戦争で旅順港閉塞作戦の指揮官として従軍し勇名をはせ、後に明治神宮宮司に任ぜられている。